

配置薬に使用される生薬の特徴⑤

村上 守一

ジャショウシ(蛇床子)

Cnidium monnieri Cusson (セリ科 *Umbelliferae*)

『神農本草経』(漢代)の上品に収載され、古くから用いられてきた生薬です。蛇床の名の由来について李時珍(明代)は「蛇、虺(まむし)が好んでその下にみてその子を食ふ。故に蛇、虺、蛇粟などの諸名をつけたのだ。」と言ひ、続いて「凡そ花、實の蛇牀に似たものは當歸、芎藭、水芹、藁本、胡蘿蔔などがある。」とも言っています。また蘇頌(1062)は「三月苗を生じて高さニ三尺になり、…四五月にその花が開き、白色で傘状をしてゐる。」と言ひ、一年草のセリ科植物であることを示唆しています。

オカゼリは国内で自生が無いことから、国内では色々の植物が当てられてきました。『和名抄』(932)にはヒルムシロ(ヒルムシロ科 *Potamogeton distinetus*)を当てていますが、小野蘭山は『本草綱目啓蒙』(1803)でこれを否定しています。当時蛇床子として使われ、現在でも和蛇床子として用いられているヤブジラミ(*Torilis japonica*)またはオヤブジラミ(*T. scabra*)についても果実の形が違うことと、毛刺があることから真の蛇床ではないと述べています。真の蛇床は「古渡りの蛇床子は形小にして毛刺なく堅に細稜あり、集解に説くところの如し形みりんか似て微大にして長みあり、これ真物にして」と述べ、浜ニンジン、現在で云うハマゼリ(*C. japonicum*)のことであるとしています。属が同一で植物の形態が似通っているためか、また種子の大きさ、形態が似ているために間違って判断したものと考えられます。もし、真の生薬を入手していたなら種子であることを考えると、播種して植物体を見てから判断しなかったかと残念に思われます。



オカゼリ



オヤブジラミ

植物の特徴

草丈 30～80 cmになる一年草。茎は直立し、円柱形で縦稜があり、柔毛が疎生します。

葉身は卵形で2～3回羽状に分裂し、先端は尖鋭形。4～7月頃複合集散花序に花を頂生または腋生します。果実は双懸果で楕円形。中国の大部分の地域に自生しています。

生 薬

果実が成熟し、黄色を帯びてきたとき株ごと刈取り、果実を打落として後天日で乾燥します。顆粒が豊満で、灰黄色、においが強いものが良品。



蛇床子

成 分

精油（1.3%）：ピネン、カンフェン、ボルネオール、イソバレレイト等。オストール等クマリン類を含有します。

薬効および使用法

収斂性消炎薬として婦人の陰部の陰痒、陰腫にまた男子のインポテンツや陰囊湿痒に三子丸や蛇床子散の漢方処方に配合されます。